

颯爽（さっそう）と10代をかけていく！

2024・7・19 校長 重枝一郎

2022年6月のこの「校長講話」で、「インプット：アウトプット＝3：7」という話をしました。学びの記憶の研究において、インプットとアウトプットの比率が3：7、アウトプットをインプットの約2倍時間を費やしたグループの結果が、記憶定着が一番高かったというものです。教科書等から知識を得る（インプット）、その知識で問題を解く（アウトプット）、この比率を3：7にするのです。アウトプットは「運動」なのです。自転車に何年ぶりにのっても乗れるのと同じ、運動性記憶なのです。

さて、このことを踏まえて今回は「苦手科目克服」について話します。おそらく、みなさんは先生方から「この夏休みに、苦手科目についてがんばるように」と言われると思います。たぶんすべての先生も、この経験をしていると思います。先生方に苦手克服法を聞いてみたいと思います。たいてい好きな科目は得意科目で、嫌いな科目は苦手科目です。食べ物を筆頭に、嫌いなものを好きになるのは至難の業です。無理強いされたら、よけいに嫌いになってしまいます。

では、「苦手科目克服のファーストステップ」とは。

まず、苦手科目に費やす時間を増やす必要はありません。だったら得意科目の時間を増やして、今より10～15点アップさせましょう。この時、取り組む順番も大事になります。まずは、得意科目から取り組んでください。食事と言えば、好きなものから、真っ先に食べてしまおうということです。

なぜか？

得意科目から取り組みれば、やる気と集中力は確実に高まります。こんなふうに、まずは勉強に対するモチベーションが高まっている状態にして、「そのついでに」苦手科目に取り組むくらいの感覚でいいのです。この雰囲気、タイトルにある「颯爽と」につながります。

実は、私たちの行動や感情にも、物理で習う「慣性の法則」が働きます。

※ 慣性の法則

物体に外部から力がはたらかないとき、または、はたらいていてもその合力が0であるとき、静止している物体は静止し続け、運動している物体はそのまま等速直線運動を続ける。

得意科目の勢いを、そのまま苦手科目に引き継ぐことができるのです。その逆は、嫌な気持ちが得意科目にまで反映されてしまいます。

おそらく、このやり方の経験をすでに手に入れている人はいると思います。得意科目の上昇は、苦手科目の上昇という副産物をもたらしてくれます。そして、最も大きな副産物として、勉強に対する意識を変えてくれます。ここから苦手科目に対する自発性も芽生えてきます。やらされ感で、イヤイヤ苦手科目に取り組むのではなく、必要に迫られて、自分の意思で苦手科目に取り組むことになります。これが、「苦手科目克服のファーストステップ」になり、「颯爽とした」みなさんの姿にもなると思います。

成長はたし算です。苦手科目のたし算は、特に大きなたし算になります。自分が成長したかどうかは、なかなか実感しにくいものです。でも、たし算をしていたら、それは、成長していると思って大丈夫です。比べるのは、過去の自分と現在の自分なのです。

1学期で「たし算」したことを、夏休みに生かそう。
そして、夏休みも何かを「たし算」しよう！